【ポスターセッションの場合のみ記入 9pt 明朝・左端揃】

ライフサイクルを通じて家族に包摂される知的障害児者の貧困

－知的障害児者の家族を対象とした家計調査からの考察－

○　佛教大学　田中智子（5114）

キーワード３つ：知的障害児者、家族、家計調査

１．研 究 目 的

先行研究において、障害者のいる世帯の所得が一般世帯と比較すると低水準にとどまることについては、江口・川上（2008、『日本における貧困世帯の量的把握』法律文化社）や田中（2009「知的障害者のいる家族の貧困とその構造」『障害者問題研究　第 37 巻 4 号』全国障害者問題研究会）によって明らかにされてきた。しかし、低水準な所得が障害者やその家族の生活をどのように規定するのかということについて検討した先行研究は見られない。

そこで本研究では、低水準な所得が障害児者本人やその家族の生活にどのような問題を生じさせるのかということについて、家計という切り口から主に以下の 2 点について検討する。

① 障害児者本人の経済状況（収支のバランス、特徴）は、ライフサイクル・居住場所別に（児童／成人・家族同居／成人・グループホーム／一般就労者）どのような実態にあるのか。また、家族への経済的依存状況はどのような実態にあるのか。

② ライフサイクルが進行するとともに、家族の経済的負担や生活問題はどのように変容するのか。

以上の考察を通じて、ライフサイクルを通じて、貧困が本人や家族の生活の中で、どのように表われるのかということを検討をする。

２．研究の視点および方法

本研究における調査は、知的障害者とその家族に日々の家計簿と行動の記録を自記によって調査の概要は以下のとおりである。なお家計簿については総務省の家計調査の費目分類を使用し、分析を行なった

【対象】X 市に居住する知的障害者をケアする家族（グループホーム利用者については、一部分グループホーム職員に記入をしてもらった）、有効回答数 153 名

【調査方法】知的障害者本人にかかる出費と食費等本人を含む家族生活に必要な出費の全てを調査票に自記式で回答を得た。その他、月々の本人の収支状況、家族生活にかかる実態と意識についてのアンケート調査を実施した。

【調査期間】2011 年 11 月 1 日～30 日（30 日間）

３．倫 理 的 配 慮

調査票はすべて無記名とし、調査結果は調査目的のみに使用すること、統計処理を行ない個人が特定されないことなどを記した書面を渡し、調査票の回収を持って同意の意思を確認した。

４．研 究 結 果

本調査を分析した結果、障害児者本人の経済状況は、収支共に一般世帯のそれを大きく下回ることが明らかになった。その影響は、主に以下の 4 点において生活問題として表面化する。

① 障害者本人の収入は一般勤労者の 3 分の 1 程度、支出は 2 分の 1 程度の水準にとどまる。その中で基礎的生活に必要な固定的経費が多くを占め、自由に使えるのは少額であり、成人期障害者の行動範囲や社会関係が、限定的・画一的であることが確認された。

② 知的障害児者における家族への経済的依存は全体で半数程度にのぼる。その中には、現金の仕送り以外に、食糧や家具・被服等の現物による支援や、外出にかかる費用等負担など家族の支出と不可分なものが発生している。

③ 世帯全体の収入と本人の活動の有意な関連が見られた。つまり、家族による経済的支援の多寡が本人の活動を規定していることが明らかになった。

④ 障害児者の支出が家計全体に占める割合は高く、特に高齢期では非常に高くなっている。その結果、家族の生活の様々な部面において影響を及ぼすことが明らかになった。

5. 考 察

以上の調査結果を検討したところ、障害児者とその家族の貧困について、次のような特徴がみられることが明らかになった。

① 障害児者の経済生活は家族による支援が所与のものとされているため、問題として表面化しにくい構造にある。

② 障害児者の貧困はライフサイクルを通じて家族に包摂されているが、高齢期になるとその度合いが非常に大きくなる。

③ 貧困は、障害児者本人に先駆けて家族に生じる。家族は、自らの活動や人生計画を犠牲にしてでも、障害児者本人の生活やケアを優先している。

本研究は、科学研究費補助金基盤研究 C（課題番号 23530800）の成果の一部である。